00. 他者と共に生きること

“人間のためだけではないもの”

人間は他者（環境や社会）を鑑みることなく都市を大きくし、生活を多様なものへと変化させてきた。しかし、日本における都市像はもはや偶像化し、縮小期へ突入している。
縮小していく都市と減っていく人口という問題を抱える、今日の日本において、他者との共生の場はどこにあるのか。そのヒントは建築とそれ以外の他者とのバランスの中に存在するのではないか。人や自然環境、生物を含めた多様な主体が主語になれる建築、あるいはそれらを包含する受け皿のような都市を考えることが、自らをも他者とする、共生の眼差しを持つことに繋がる。

01-1. 大地と共に生きること

大地は日々、私たちを言葉通り支えている。しかし、私たちは本来の姿や大地が持つ大切な働きを、無理に押さえ込む形を取ってきた。大地、そして環境のためでもあるために、この力学的な土木操作を見直す必要がある。大地と共生する過程で、私たちは小さな変化に目を向ける”気付き”を得る。

01-2. 広域化した宅地と生きること

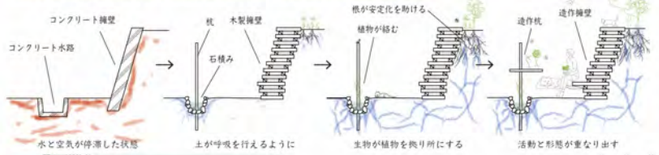
戦後、住宅数の不足と共に宅地の造成が全国で行われた。結果、大地との関係が切り捨てられた普遍的な風景を持つまちが日本には溢れている。人口減少により空き家や空地が増えている中、過去に作られた風景を肯定しつつ、新しい価値観をまちに付与することで、他者として排除してきたものと共生を図る一歩となるのではないか。

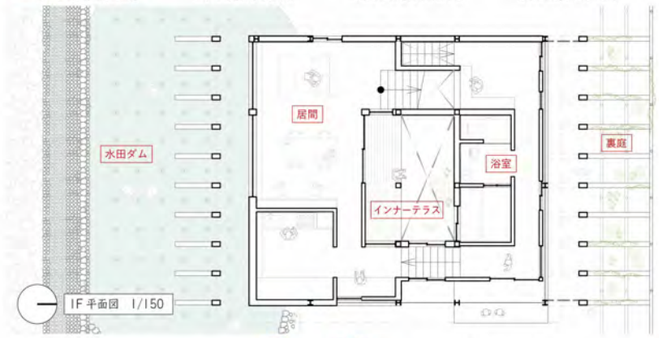
02. ‘大地’‘生物’‘人’

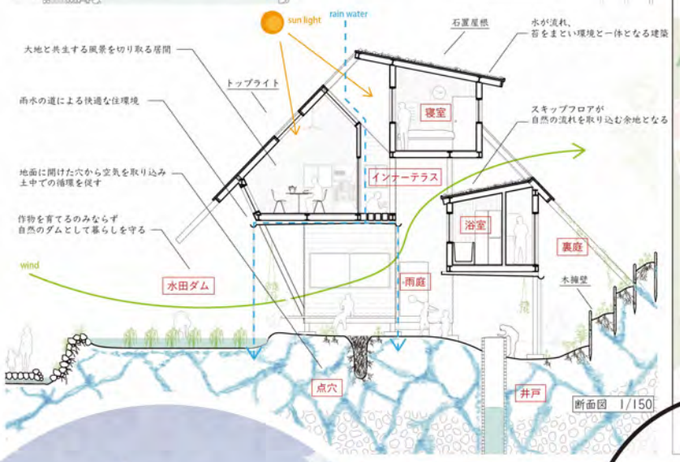
大地、生物、人、それぞれが主語になる宅地を描く。全てを支える大地は循環する環境となり、生物はそれらを巧みに扱いながら生きる。そして人は、与えられた環境ではなく、自らの責任の範疇で維持管理する大地に暮らす。その均衡を測りながら暮らすことこそ、本来気が付くことのない些細な他者との接点を認識し、また自身を他者として、変化していくあり方になり得る。

03. 大地から人への設計手法

現在の住環境において、表層の水は土中環境を涵養せずに水路へと逃亡してしまう。その結果、土壌は硬化し不安定となったり、目詰まりを起こしてしまっている。そこで、水脈分断要素の破砕やコア抜きなどを行い、通気浸透水脈環境の健全化を図る。植物の根が地盤の安定化を支え、絡まった落ち葉に生物が集まる。人々は自ら模索し、それぞれにあった形態・機能を持った造作を形成していくことで大地と重なり合う。







04. 人間のためでもあるまち

対象敷地：神奈川県鎌倉市梶原

昭和中期に開発された宅地を舞台とする。山間部の谷に位置し、豊かな自然を背後に持つ。元々の地形を手がかりとしながら、まちに点在する建築が、大地と人を重ねていく。

a. 大地に生えるラーニングセンター

まちに存在する大きな擁壁からまるで生えているかのような、大地に根付くラーニングセンターを計画する。S字カーブ沿いの高い傾斜を利用した、本来想定されていない空間に建つダイナミックな建築と、人々が手をかけながらゆっくりと安定していく擁壁としての2つの性質を併せ持つ。まちの人々をはじめ、町外に住む人、移住を考える人など多様な人が主語になれるプログラムを持つ。

c. 水田ダムと植栽棚側溝

水田の保水機能を利用した自然ダム。用水路に流す水量をコントロールするとともに、用水路に生物たちのための環境装置を設置する。

d. 擁壁内駐車場を改築したバス停

車を手放した家庭に多く残る、擁壁を掘った駐車場を地域で活用できるスペースとして改築する。その用途はバス停などのインフラと関連したものから、植物を育てる暗室としてなど幅広く扱うことができる。

e. 風と光に包まれた擁壁直売所

擁壁を風や光を感じることのできる土木造作とすることで、大地と繋がり、多様な生態系の拠り所にもなる。人々は野菜を持ち寄り、自然な直売所として運用されていく。

f. 擁壁沿いの休憩所と遊び場

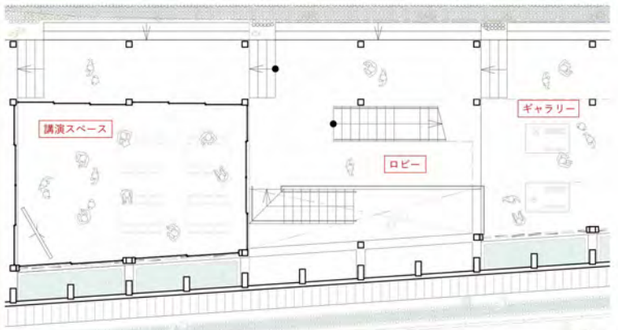
町中に多く存在する擁壁を休憩所や遊び場として作り変える。大地と共に暮らすことを体感する場所でもあり、人々の交流やメンテナンスを通して町の新たな財産となっていく。

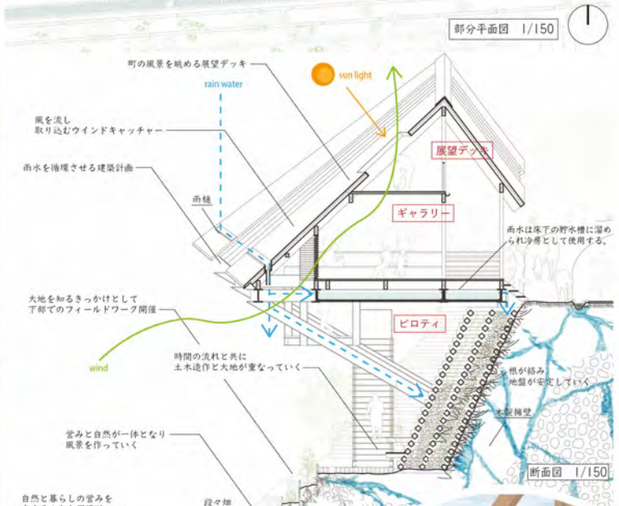
b. 大地と暮らす家

都会より移り住んできた夫婦。ラーニングセンターでこの町と活動を知り、自らの手で、大地との関係を築けるような環境を希望し、住宅を建てた。

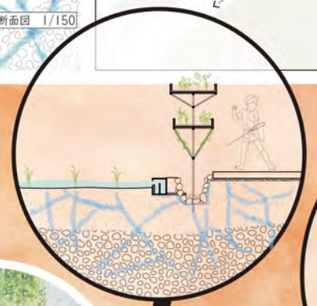
g. 空き家を改修したレストラン

地産地消をコンセプトに展開するレストラン。ラーニングセンターからの紹介で物件を決め、改修した。大きく家屋を減築し、大地を直に感じる環境で食事を楽しむ。



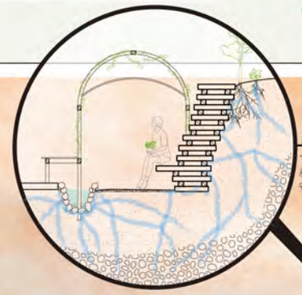


大地と暮らす家



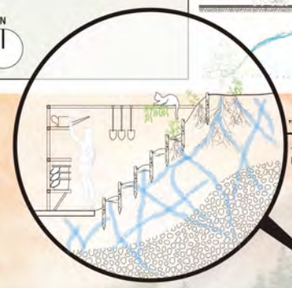
植栽棚側溝

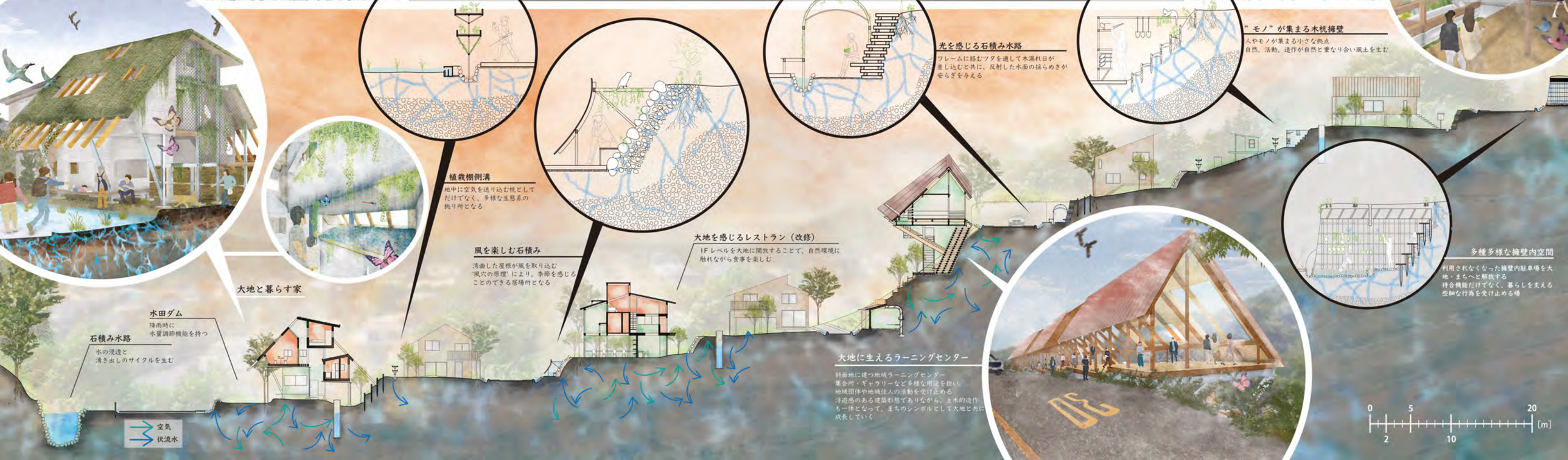
地中に空気を送り込む梳として だけでなく、多様な生態系の 拠り所となる



光を感じる石積み水路

フレームに絡むツタを通して木漏れ日が差し込むと共に、反射した水面の揺らめきが安らぎを与える



”モノ”が集まる木杭擁壁

人やモノが集まる小さな拠点
自然、活動、造作が自然と重なり合い風土を生む